

ファンタスティック・フォー 銀河の危機

2007(平成19)年7月19日鑑賞(試写会・大阪厚生年金会館芸術ホール)

★★★



第1章

シリーズ物がいっぱい

監督=ティム・ストーリー/出演=ヨアン・グリフィズ/ジェシカ・アルバ/クリス・エヴァンス/マイケル・チクリス/ジュリアン・マクマホン/ローレンス・フィッシュバーン/ケリー・ワシントン/アンドレ・ブラウアー (20世紀フォックス映画配給/2007年アメリカ映画/92分)

……ファンタスティック・フォーのキャラは前作と同じだが、今回はすごいパワーを持ったシルバーサーファードという新キャラが目玉！ 彼は何のために地球に現れたのか？ その背後にいるものは一体ナニ……？ 第2作のテーマはそこにあるが、まあ、そんなことはあまり気にせず、スクリーン狭しと暴れ回るキャラクターたちを楽しみ、銀河の危機がいかに回避されるかを子供心に戻って楽しんでみればいいのでは……？

2年後の第2作は……？

第1作の『ファンタスティック・フォー 超能力ユニット』(05年)を観たのは、2005年8月4日の試写会。そしてその評価は星2つと低く、「しかし、いくら興行収入をあげたからといって、こんな昔のアメリカン・コミックのキャラを登場させることによって、面白おかしく観客を笑わせようという作品ばかり続けていいの……？ こんな状態が続けば、いずれ韓流や中国などのアジア映画にハリウッド映画も席卷されるのでは……？」と書いた(『シネマルーム8』135頁参照)。

私はアメリカン・コミックものの映画はあまり好きではないから、この手の映画の評価が低いのは当然だが、最近は少し気分的にゆとりができたためか、「楽しければそれでいいじゃない」と思う気持も生まれている。そのうえ、今回あらためてプレスシートを読み、1961年にマーベル・コミック社のスタン・リーが生み出したこの『ファンタスティック・フォー』のキャラクターが、その後のスパイダーマン、X-MEN、ハルク、デアデビルなどのキャラクターを生み出したことや、今回新登場の

シルバーサーファーのキャラを生み出したことを勉強してみると、バカバカしさよりも楽しさを感じた方が、と考えるようになってきた。

さらに、5月22日に観た『ファウンテン 永遠につづく愛』(07年)も不思議なストーリーの映画だったが、特筆すべきは映像の美しさ。映像技術の進歩により、最近のハリウッド映画の1つの特徴は、CGやVFXをふんだんに活用した映像の美しさだから、たまにはバカになって頭の中を空っぽにしてその美しさを感じ、楽しく2時間を過ごせればいいのではと考えるようになったわけだ。そんな2年間の心境の変化の中で観た第2作は……？

4人のキャラと超能力は同じだが……

『シネマルーム8』131頁以下に、①原作は1961年のアメリカン・コミック！、②ストーリーのポイントは？、③4人のキャラの紹介、④敵役のキャラの紹介、⑤Dr.ドゥームからダースベイダーへ等の『ファンタスティック・フォー』を理解するうえでの基本枠を記載しているので基本的なところはそれを参照してもらうこととし、今回は第2作特有のポイントのみを評論したい。

4人のキャラは今回ももちろん同じで、これはいくらシリーズが続いても変わるはずはない。そして超能力も同じだが、今回のちょっとしたアイデアは、「ある出来事」以来、ジョニー（クリス・エヴァンス）の手がスーザン（ジェシカ・アルバ）やリード（ヨアン・グリフィズ）そしてベン（マイケル・チクリス）に触れると、互いの超能力が一瞬入れ替わるというもの。こんな超能力の互換性が生まれると一時的には混乱するが、かえって便利なことも……。

今回の目玉はシルバーサーファー

映画の冒頭、富士山をバックにした駿河湾が登場し、一隻の漁船の上を謎の銀色飛行物体が来襲。ビックリして海の中へ転落した漁師たちは、凍ってしまった海の上でビックリ……。次にエジプトの砂漠にそびえているスフィンクスの上を謎の銀色飛行物体が飛び去ると、観光客の目には雪に覆われたスフィンクスが……。

この謎の銀色飛行物体こそ、全身銀色に輝く人間体で、しかも銀色のサーフボードに乗っているシルバーサーファー（ローレンス・フィッシュバーン）だった。この映画最大のポイントはこのシルバーサーファー。彼(?)は、惑星を破壊しそのエネルギー

ギーを吸収することでしか存在できないギャラクタスと呼ばれる超宇宙生命体のヘルド（手先）。そして彼の使命は、ギャラクタスが吸収する惑星を探し出すこと。もっとも、そんなシルバーサーファ어의キャラがわかるのは、リードたちがヘイガー將軍（アンドレ・ブラウアー）の要請を受けてさまざまな研究・分析をした結果おぼろげにわかったことだが……。

こんなワケのわからない奴のターゲットにされたのでは地球はおしまい……。現にシルバーサーファ어は、その後カリフォルニア、ニューヨーク、ロンドン等に次々と襲来し、悲惨な爪痕を……。さあこんな状況の中、地球滅亡を防ぐ手立てはあるのだろうか……？

スーザンはやけに女らしさを……

リードの恋人だったスーザンは、今リードとの結婚式を控えて幸せの絶頂にあるはずだが、リードは何かと研究に忙しいため若干不安な気持も……。それを慰め勇気づけているのが、ベンの恋人のアリシア・マスターズ（ケリー・ワシントン）。しかしこんなスーザンの姿を見ていると、彼女は現代アメリカの女性であり、F4の要ともいべき女性科学者であるにもかかわらず、やけに女らしさを強調しすぎでは……。

そんな中、ニューヨークでの結婚式の当日、式場にシルバーサーファ어が現れたから大変。結婚式はメチャクチャにされたうえ、シルバーサーファ어를火の玉となって追いかけたジョニーはもろくも敗退。そのうえ、その日以降ジョニーの超能力に翳りが見えるとともに、ある異変が……。

ビクター・バン・ドゥームが復活！

前作で鉄仮面を被った悪役として登場したビクター・バン・ドゥーム（ジュリアン・マクマホン）は、F4のメンバーたちによって葬り去られたはずだったが、その彼が第2作で見事に復活！ 彼がヘイガー將軍に登用されたのは、F4のメンバーたちによるシルバーサーファ어への1度目の攻撃が失敗したため。リードたちは「ドゥームを信用できない」とヘイガー將軍に進言したが、1度信頼を失ったのはリードたちだったから、それはとても受け入れられないもの。そこで仕方なく、ドゥームとの共同研究によってシルバーサーファ어への対抗策をひねり出そうとしたが……。

こんなドゥームが、シルバーサーファ어との対決を制した後どんな行動をとるのか

が第2作のポイント。そして、それは今からでも予想できそうなもの……？

シルバーサーファーとの対決は……？

リードの研究によって発見したのは、シルバーサーファーのパワーはサーフボードから出ているためこれを切り離せばよいという意外に単純なもの……？ もっとも、それを実行するのに電磁波がどうしてこうしてという話はサッパリわからないが……。まあ、そんなサイエンス色満載の仕掛けを楽しみながら、F4とドゥームそしてヘイガー將軍たちの共同作戦と統一戦線による、シルバーサーファーとの闘いを存分に楽しもう。

統一戦線方式の弱みが……？

ここまでは地球側の統一戦線の勝利だが、シルバーサーファーを逮捕(?)した後大変なのは、シルバーサーファーのバックにいる黒幕は誰なのか、そしてその狙いは何なのかを自白させること。そして、それを担当するのはもっぱらヘイガー將軍。

統一戦線方式は共通の敵に向かう時はいいのだが、往々にして目的を達成した後崩壊することがある。そして、そんな弱点がこの映画でも……。すなわち、リードたちの協力によってシルバーサーファーを逮捕したヘイガー將軍は、もはやリードたちはお払い箱とばかりに事実上軟禁状態に……。さあそんな中、ヘイガー將軍はシルバーサーファーの自白を引き出すことができるのだろうか……？ そしてドゥームの動きは……？

やはり心の交流がポイント

ヘイガー將軍は力づくで自白を引き出そうとするものだったが、最初の闘いの時シルバーサーファーに助けってもらったことにこだわりをもつスーザンは、シルバーサーファーとの間に人間的な交流を感じていた。そこでスーザンは得意のインビジブル・ウーマンとしての超能力を発揮して、繋がれているシルバーサーファーの前に。そして腹を割って話を聞いたところ、シルバーサーファーの名前はノリン・ラッド。そして彼はゼンラという惑星の住人だったが、ゼンラがギャラクタスの脅威にさらされた時、故郷の星を救うべく自らをギャラクタスに差し出したため、今もギャラクタスのヘラルド(手先)として働かなければならない身の上なのだということを告白した。

リードたちはそんなシルバーサーファーを助けようとしたが、その時既に、ドゥームはハイガー將軍を殺害したうえ、サーフボードを奪いその能力を身につけてしまったから大変。さらに、ギャラクタスの地球への脅威は刻一刻と迫り、滅亡までのカウントダウンが既に始まっていた……。

1962年の「空飛ぶバスタブ」は今……？

1961年につくられたマーベル・コミックの中で、シルバーサーファーというキャラクターを創造したこともすごいが、1962年のコミックで初登場したのが、「空飛ぶバスタブ」と呼ばれるF4専用のメカであるファンタスティックカー。

それから45年を経過した2007年の今、「空飛ぶバスタブ」のイメージは、超メカニックで流線型のカッコいいボディに変身した。シルバーサーファーのサーフボードを奪って無限の力を手に入れたつもりのドゥームを追うのは、この現代版ファンタスティックカーに乗ったリードたち4人のメンバーだが、さてその攻防戦は……？

この「空飛ぶバスタブ」の現代版イメージを楽しみつつ、『ファンタスティック・フォー』45年の歴史をしっかりと味わいたいものだ。

原作をはるかに超えて……

1961年にマーベル・コミックで描かれた『ファンタスティック・フォー』の舞台がニューヨークに限定されていたのは当然。だって、その時代では海外旅行に行くのは大変なことで、ごく一部の富裕層しか経験できないものだったから。しかし2007年の今は状況が一変し、世界はそして地球は狭くなり、あらゆるネットワークで結ばれる時代となっている。したがって、1961年に出発した『ファンタスティック・フォー』のキャラを守りながら、第2作の舞台は地球的規模になり、そのテーマは地球を守るということに……。もっともそう考えてみると、第2作のサブタイトルを「銀河の危機」としたのは少し誇大広告気味で、その実態は「地球の危機」……。

ギャラクタスとの対決は……？

「空飛ぶバスタブ」に乗ってドゥームとの闘いを展開している間にも、シルバーサーファーをヘラルド（手先）としたギャラクタスが地球に迫っていた。ギャラクタスと闘うにはどうすればいいのか？ それは、さすがのリードにも解答が出せないもの。

すると、地球はこのまま滅亡することに……？

そんな時立ち上がったのは、今やスーザンとの心の交流が深まり、すっかりスーザンの味方になってしまったシルバースーファー。さて、彼はスーザンのためにどんな行動を……？ それで、この映画の最後のハイライトシーンとなるから注目を！

おもしろいオチもお見逃しなく！

サスペンス映画の天才ヒッチコック監督はカメオ出演が大好きで、たくさんの映画にあの愛嬌のある顔で出演している。シリアスなサスペンス映画ですらそうなのだから、マーベル・コミック原作の楽しければそれでいいというテイストの映画には、そんなちょっとしたオチも入れなければ……。そんな思いを実現したのが、スーザンの結婚式に出席しようとした『ファンタスティック・フォー』の原作者スタン・リー……。

彼はスーザンやリードのキャラクターの生みの親。したがって、招待状などなくても、当然リードとスーザンの結婚式には出席できるものと考えて出かけていったのだが……。世紀の有名人同士の結婚式に参列できるのは、それなりのセレブでなければならぬのは当然で、事前に厳格にチェックされていたのは当然、しかし、スーザンやリードの創設者であるスタン・リーは、彼らの結婚式に出席できるのだろうか……？

「俺はスタン・リーだ！」とタンカを切るシーンがあるが、これは『ファンタスティック・フォー』誕生の舞台裏をわかっていなければ、全然理解できないもの。したがって、そんな勉強もしっかりしたうえで、そのシーンをお見逃しなく……。

2007(平成19)年7月21日記